

また山口県防府市の阿弥陀寺の湯屋遺構は、湯屋を解体調査して、近世・中世の湯屋遺構が確認された。この調査の結果、近世には2基の釜が据えられ、中世には竈1基の遺構が出土している。また現存する湯屋としては、東大寺の大湯屋（註9）がある。この東大寺の湯屋は鎌倉時代の延応元（1239）年に建てられ、応永15（1408）年に大きく改造されている。湯屋には釜場・浴場・前室があり、釜で湯を沸かして入浴したとみられている。

この信濃国分寺跡出土の礎石建物跡については、明確な出土遺物が無く、この竈跡も礎石建物に当初から設置されたものかどうかは不明確である。竈跡とみられる焼土や石を用いた遺構が西辺中央の内部に1基検出されたが、周辺には石敷、排水溝、井戸跡などの湯屋の遺構は確認できない。このため現時点では、湯屋跡と確定することはできず、この礎石建物跡が仏堂跡か湯屋跡の可能性があることを指摘するにとどめておきたい。

| No | 名称 | 所在地 | 建築構造(時期) | 建物規模 | 備考 |
|----|---------|------------|---------------------|-------------------|-------------------------------------|
| 1 | 中禪寺薬師堂 | 上田市西前山 | 宝形造・茅葺 (鎌倉時代初期) | 3間×3間 6.75m四方 | 平安時代後期の様式を残すが床下の足固貫から時期を推定 |
| 2 | 福德寺本堂 | 下伊那郡大鹿村大河原 | 入母屋造・柿葺 (室町時代前期) | 3間×3間 4.85m四方 | 信濃宮と称された宗良親王との関連が推定されている |
| 3 | 淨光寺薬師堂 | 上高井郡小布施町雁田 | 入母屋造・茅葺 (室町時代中期) | 3間×4間 | 応永15（1408）年の墨書が残る |
| 4 | 盛蓮寺観音堂 | 大町市社 | 寄棟造・元茅葺 (室町時代後期) | 3間×3間 5.475m四方 | 寺の古文書に文明2（1470）年の建立と伝える |
| 5 | 法住寺虚空蔵堂 | 上田市東内 | 入母屋造・柿葺 (室町時代後期) | 3間×4間 | 文明18（1486）年に再建の棟札が残る |
| 6 | 松尾寺本堂 | 安曇野市有明 | 寄棟造・元羽葺 | 3間×3間 | 大永8（1528）年に仁科氏の中興開基と伝える |
| 7 | 遠照寺釈迦堂 | 伊那市高遠町山室 | 入母屋造・現在銅版葺（室町時代後期） | 3間×3間 | 仏壇に天文7（1538）年の墨書があり、「大仏様」の建築手法がみられる |
| 8 | 智識寺大御堂 | 千曲市八坂 | 寄棟造・茅葺 (室町時代後期) | 3間×4間 | 和様を基に、組物・木鼻に禅宗様の手法が残る |
| 9 | 西光寺阿弥陀堂 | 上田市富士山 | 入母屋造・茅葺 (室町時代後期) | 3間×3間 5.4×7.2m | 禅宗様の手法を多用し、16世紀前期頃とみられる |

第24表 長野県内の中世の主な小仏堂一覧（県宝の西光寺阿弥陀堂を除き他は重要文化財）

第3節 九九算の文字瓦について

僧寺西門跡東側付近からは「七九六十三」の九九算のヘラ書き文字が出土して、注目された。この文字瓦は縦11.0cm、横11.3cmの大きさの平瓦で、凸面には斜状平行叩き目、凹面には布目痕が残存し、その形状から8世紀後半に位置付けられた。文字は凹面に細く鋭利な書体で「七九六十三」と刻書され、二字目の「九」を除いて筆順は現在と同一である。比較的熟達した書体で、文字の意味を理解して、九九算を瓦の焼成前に、製作した瓦工などが習書として刻書したと推測された。こうした九九算を瓦にヘラ書きした資料としては、奈良県桜井市の山田寺跡で「九々八十一、八九七十二」、明日香村の奥山久米寺で「九九八十一、八九七十二」の瓦が出土（註10）し、いずれも7世紀後半のもので瓦工の習書とみられている。

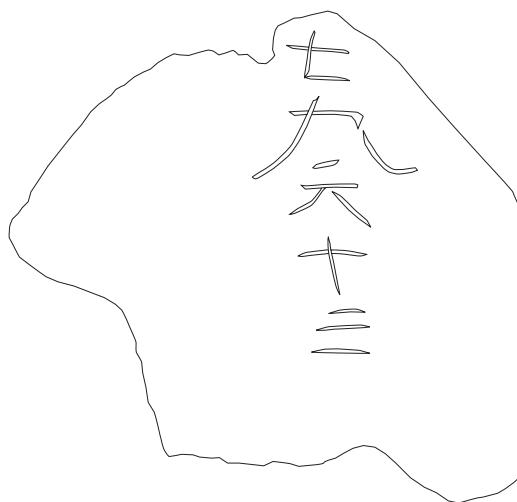
九九算は中国すでに殷代（紀元前15世紀から紀元前11世紀）の甲骨文字にみられ、わが国には7世紀後半に浸透したと推測されている。万葉集の山部赤人の歌（卷6-926）に「わご大君は・・・朝狩に十六（鹿猪・しし）履み起こし」と十六と書いて四四（鹿猪）と読ませている。また卷13-3330の歌には「八十一里」と書いて

「くくり」と読ませ、九九算による戯書とされている。

(註 11)

九九算を記した木簡は藤原京跡、平城京跡、平安京跡をはじめ各地でみられ、千曲市の屋代遺跡群からも九九算の墨書(木簡 81 号・116 号・117 号の 3 点)が認められている。当時の九九算は、出土した木簡や瓦、源為憲が天禄元(970)年に藤原為光の子の教科書として編纂した事典である『口遊』(くちずさみ)などの史料から「九九八十一」から始められたとされている。九九算は暗算で即座に計算することができ、知識の無い一般の人々には神秘性をもつ不思議な術と當時はみられていたという。

この西門跡付近出土の「七九六十三」の刻書の平瓦の上部は欠損しているが、そこに「九九八十一」「八九七十二」の九九算の刻書があった可能性が推測される。瓦に九九算が習書された事例は前述のように少なく、本資料は九九算の瓦への習書として貴重な事例と考えられる。



0 10cm

第 94 図 僧寺西門跡付近出土九九算刻書平瓦

註

- 1 上田市教育委員会 2002 年『国分遺跡群』
- 2 角田文衛編 1987 年『新修 国分寺の研究 第五巻下 西海道』吉川弘文館
- 3 山中敏史 2003 年「VI-7 門」『古代の官衙遺跡』奈良文化財研究所
- 4 毎日新聞社 2007 年「藤原宮跡 最古の鎮壇具出土」(2007 年 11 月 30 日付毎日新聞記事)
- 5 花園大学発掘調査スタッフ 2008 年「花園大学 発掘日誌」(2008 年 2 月 7 日付ブログ記事)
- 6 矢島宏雄 1982 年「五輪堂遺跡」『長野県史考古資料編 全一巻(二)主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会
- 7 太田博太郎監修 1987 年『長野県の国宝・重要文化財—建造物編一』郷土出版社
- 8 (財)向日市埋蔵文化財センター 2003 年「長岡京跡右京第 755・762 次調査現地説明会資料 宝菩提院廃寺の湯屋遺構」
- 9 東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事事務所編 1938 年『国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事報告書』
- 10 金子裕之 1996 年『歴史発掘 12 木簡は語る』講談社
- 11 佐竹昭広他 2002 年『萬葉集 三』新日本古典文学大系 岩波書店